

東日本大震災から15年 「災害の学び舎を」 名古屋のNPOが宮城の若者の夢を支援

2017年の開館当初の「七ヶ浜みんなの家きずなハウス」。震災15年の今年、震災伝承施設としてリニューアルオープンする＝認定NPO法人レスキューストックヤード提供

小学2年生のときに東日本大震災で被災し、現在24歳となる若者が、地元の宮城県七ヶ浜町で「災害の学び舎」となる施設をオープンさせようとしている。きっかけを作った名古屋市認定NPO法人「レスキューストックヤード(RSY)」は、事業の実現と継続を資金面で支援しようとクラウドファンディング(ネット上の資金調達)の準備を進めている。

◆ 意識を変えた震災学習と「きずなハウス」 ◆

事業に取り組もうとしているのは若生遥斗(わこう・はると)さん。出身の七ヶ浜町は仙台市のすぐ北に位置する人口1万7000人余りの町で、名前の通り7つの浜のある半島が、2011年3月11日からの震災によって災害関連死を含めて111人の犠牲者を出す大きな被害を受けた。

若生さんは学校で掃除をしていたときに地震にあい、迎えに来た祖父母とともに高台へ避難。津波で車が次々と流されていく様子を見た記憶が生々しく残っている。た

だ、自分の家が流されたり、身内が亡くなったりしたわけでもないことから、若生さんは震災について「まったく関心がない」まま中学生になったという。

しかし、中学1年の震災学習で、瓦礫が流れ着いた海岸の清掃や災害公営住宅での交流会などを経験して、徐々に意識が変わっていく。特に大きかったのが中2のときに参加した、今回の震災伝承施設の計画につながる「きずなハウス」での職場体験だった。

◆ 一般企業を退職し、仕事として伝承の道へ ◆

きずなハウスは震災直後から七ヶ浜で復興支援活動に当たっていたRSYが、子ども支援のために最初は仮設商店街の店舗として、その後は町の公民館の一角を借りて開いた店舗。小さ

な店内いっぱいには駄菓子を並べたり、町のキャラクター「ボッケのぼーちゃん」を模した「ぼーちゃん焼き」というたい焼きを作ったりして、子どもたちには放課後のたまり場として親しま